サークル紹介

にゅ～てんてん

私たち「にゅ～てんてん」は、主に点字の紹介や啓発活動を行っています。その中から特に力を入れている4つの活動について紹介します。

1つ目は七夕企画です。この企画では、願い事を自分で短冊に点字で打ってもらい、笹の葉につるして飾るという活動を行っています。点字で願い事を打つということで、みんなに知られたくない願い事も打つことができる上、点字を学ぶこともできます。

2つ目はペットボトルキャップ回収です。これは、定期的に部員が学内(コミセン)のキャップを回収し、洗浄、選別を行います。選別したキャップは半田にある「山下化成工業」に持っていきます。そこでは、キャップを回収し、ワクチンに交換するという活動を行っています。

3つ目はペットボトルキャップでの点字作成です。この点字作成では、ワクチン交換で使用しないキャップを利用しています。作成したものは、コミセンの2階に掲示しています。現在は、「みんなのキャップをワクチンに！！」という言葉で掲示しています。また、掲示する言葉を定期的に変えていくことも計画中です。

4つ目は盲学校の見学です。今回は今年の2月6日に、「にゅ～てんてん」のメンバーで名古屋盲学校に行かせていただきました。そして教室や図書館の見学をさせていただきました。図書館では、盲学校ということもあり見たことのない量の点字の本がありました。特に、辞書や英語の本にも点字がついていたことは部員全員が驚きました。盲学校を実際に見学したことで、盲学校ならではの特徴をたくさん発見でき、とても良い機会となりました。

現在は、盲学校での見学を活かして点字の絵本作りを企画しています。また、点字のスキル向上のための勉強会の開催も予定しています。現在、部員12人という人数で活動しています。今後も点字について広げていきたいと考えているので、点字に少しでも興味がある人、点字に触れてみたいと考えている人は、お気軽に支援センターにお越しください！メンバー一同お待ちしております。

一緒に点字のスキルを磨きましょう！！

ドミノ体験記

子ども発達学科保育専修2年
鈴木静香（すずき　しずか）愛知県・清林館高校出身

私は、24時間テレビで行われるドミノ企画に実行委員として参加させて頂きました。約3ヶ月前から行われるチームがドミノを通して伝えたいことをどのように形にするのかということを話し合うミーティングに参加し、チームのドミノに対する想いを感じました。また、プロの方もなんとか形にできるように考えてくださっていてドミノに携わっている全ての人が全力なんだと分かりました。短い期間でしたがドミノ1つ1つに想いが詰まっていると思うとなんともいえない感動がありました。

リハーサルと本番を含めた3日間ではどのチームも朝早くから張り詰めた緊張感の中で何度もドミノを並べ、仕掛けをチェックしていました。並べている途中でも倒れてしまうチームもありました。でも、チーム内で「大丈夫！大丈夫！」と声をかけあっていました。

本番では今までにない緊張感がありました。その中で仕掛けがうまく倒れなかったチームもあり悔しい思いもしました。それと同時にチームドミナーの姿を見ていてどのチームドミナーも自分たちのチームのドミノの結果だけでなく全てのチームに対して拍手していることに気づきました。ドミノを並べていく中でチームドミナーにしか分からないチームでやることの難しさや悔しさもあったのだろうと考えさせられました。それと同時にこの3日間でチームや実行委員、この企画に携わる全ての人が1つになったように感じました。

この企画を通して私自身も大切な仲間ができました。3ヶ月間という長いようで短い期間の中でこんな素敵な体験ができて、この企画に携わることができて良かったです。

We Love こたつ

日本福祉大学　子ども発達学部ニュースレター

第22号 2019年11月5日発行

この号の主な内容

・保育実習体験記　施設実習
・教育実習体験記　中学校実習　1
・教育実習体験記　幼稚園実習
・わたしたちの授業を紹介します　2
乳幼児の音楽演習Ⅱ
・教員紹介
・ゼミ活動紹介　3
・サークル紹介
・ドミノ体験記　4

保育実習体験記　施設実習

子ども発達学科保育専修3年
中島佑太（なかしま　ゆうた）愛知県・岡崎東高校出身

今回の施設実習では乳児院に10日間行きました。この10日間で本当にたくさんのことを学び、経験をさせていただきました。最初は乳児院での1日の流れもわからず不安なことも多くありましたが、日に日に子どもたちや先生方と関わっていくたびに、自分がどのような役割をしたらいいのかなどわかるようになったことで、1日の実習がとても楽しく充実したものとなり時間の流れがとても速く感じました。

一週目では乳児クラスに入らせていただき、おむつ替えや授乳、食事介助などをしました。実際に子どもと1対1でやることは難しいことも多く、1人ひとり特徴があってうまくいかないことばかりでした。どうしたらうまく出来るのか先生からアドバイスをもらって、実践ごとにやり方を工夫したりと、日々チャレンジの連続でしたがその中でも乳児さんと関わるいい経験になりました。自由遊びの時間では、まだ危険なことも多いので子どもたちをしっかり見ながら、怪我に繋がらないように見守る大切さを知りました。一緒に遊びの中で子どもたちと関わることや抱っこしながら外に出て歩いたりすることなど本当にかわいいと思う場面や癒やされる一面に出会い、赤ちゃんとの関わりは難しいことばかりですが、とてもやりがいのある仕事だなと感じました。

二週目には幼児クラスに入りました。乳児クラスとはまた違った難しさがあり、特に感じたのは何か物事をする際に、嫌だと言われることや泣き崩れてしまうことがあり、なかなか自分が思ったように動いてくれないことでした。だからこそ普段からの子どもたちへの声かけがいかに大切なことか思うようになり、どうしたら子どもに伝わるのか、伝えるようにするには1つ1つの言葉選びがその場面に応じてできるようにならなくてはいけないなと実感しました。

施設実習を通して保育園とはまた違った役割があり、新しく覚えることばかりで苦戦することもありましたが本当に充実した10日間だったなと思います。子どもたちと実際に関わり学ぶことは実習でしか出来ないことなので、今回学んだことをこれからの大学生活や今後の子どもたちとの関わりの中で活かしていくことが出来たらなと思います。

ゼミ活動の様子

教育実習体験記　中学校実習

子ども発達学科学校教育専修4年
澤井剛（さわい　つよし）愛知県・星城高校出身

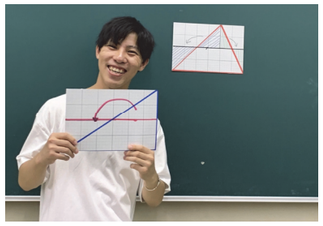
昨年私は、5年生のクラスで4週間教育実習をさせていただきました。実習では難しいことばかりでしたが、たくさんのことを学び、教師への思いをより一層高めることができました。

その中でも特に、子どもたちのことを思い、全力で関わることの大切さを学びました。全力で接することでお互いに信頼関係が生まれ、子どもたちも応えてくれるようになりました。授業実践では不安や緊張でいっぱいで、失敗したと思っていても「先生の授業おもしろかったよ」「早く次の授業が受けたい」「先生の授業で初めて側転できたよ」などの、たくさんの嬉しい言葉を掛けてもらいました。そこには、全力で接したことによる信頼関係があったからだと思います。

また、“教師は五者たれ”と教わりました。五者とは、子どもたちに勉強を教える人である“学者”、子どもたちを引きつけられる人である“役者”、子どもたちにより良き道を示せる人である“易者”、子どもたちが成長する環境がつくれる“芸者”、子どもたちの不安や悩みなどを取り除ける“医者”のことを言います。実習中の私は目の前の自分の課題に必死で、まだまだ五者になりきれていないと痛感させられました。最初から五者を完璧にこなすということは、大変難しいことなのかもしれません。ですが、先ほども述べたように全力で子どもたちと関わるなかで信頼関係を構築し、“子どもたちから学ぶ”という姿勢をもっていれば、自然と五者に近づいていけるのではないかな

と実習を経験して思うことができました。

4週間の中でも、子どもたちは大きく成長していました。そして、私自身も成長することができました。子どもの成長を支え、共に成長していくことができる教師という仕事は大変魅力的だと思っています。また教師は、子どもたちを笑顔にすることができます。私は子どもたちの笑顔のために、何事にも全力で取り組んでいける教師になりたいと4週間の教育実習で思うことができました。



教育実習体験記　幼稚園実習

子ども発達学科保育専修4年
渡辺真穂（わたなべ まほ）高知県・高知丸の内高校出身

6月に4週間の幼稚園実習をさせていただきました。いろいろな学びがありましたが、ここでは遊びの面について報告します。

子どもたちは、どろんこあそび用の服に着替えて遊び、思いっきり汚れてもいいという環境を用意することで服の汚れも気にせず存分に楽しむことができていました。また、別の園では、ブロックあそびはこの中で、おままごとをする時には、ブロックをつかってはいけません、というようなそれぞれの玩具を使っていい場所が決められていました。しかし、今回の園では、その決まりがないことによって、ブロックをおままごとの材料にし、より子どもの自由な発想の広がりを見ることができました。子どもたちにとって、思いっきり遊ぶことができる環境を用意することは大切なことだと感じました。そして、遊びの中での保育者の声かけも大切で、子どもたちが自分で考えてやってみようという意欲や、子どもの考えを共有することで他の子どもの考えを知り興味をもって遊ぶことができていたと思いました。しかし、その声かけが多すぎてもいけないということを学びました。また、保育者が一緒に遊びを楽しむことによって、興味をもって遊ぶことができたり、より楽しむことができると学び、全力で楽しむことも大切だと感じました。

散歩に行った時には、地域の方が手を振ってくれたり挨拶をしてくれたり積極的に子どもにかかわっている姿を見ました。子どもたちは地域の方に見守られていると感じたとともに、色々な行事も地域の方の支えがあって成り立っているものもたくさんあることを知りました。地域の方も子どもの笑顔や元気な姿を見て、パワーをもらっていると思うので、田舎ならではの良いところだと感じました。このように、地域と保育のつながりがあったら安心して過ごすこともできると思いました。

実習前の保育所でのボランティア活動の様子

わたしたちの授業を紹介します

乳幼児の音楽演習Ⅱ

子ども発達学科保育専修2年
田中海斗（たなか かいと）福井県・美方高校出身
山本七海（やまもと ななみ）愛知県・日本福祉大学付属高校出身

音楽演習の授業では、ピアノと歌を通して基本的な知識や技術を身につけることはもちろんのこと、保育現場で実践できる豊かな感性や表現力を養うことができます。私は、ピアノ初心者ですが、笹谷先生の丁寧な指導とアドバイスで少しずつ技術を身につけています。ピアノの練習には、自主練習がとても大切で、大学内の施設であるピアノ棟などを活用し、授業に向けての練習をしています。授業は、個人レッスンを中心に展開され、ひとりひとりのレベルに合わせた指導をしてもらえます。毎回の授業で自分の課題を明確にしてもらえるので、自主練習の時間に、自分でもしっかりと練習を行うことが出来ます。

初心者の私はピアノに関する知識が全くなかったので、笹谷先生には、楽譜の読み方から指の動かし方まで丁寧に指導していただきました。ピアノの経験がある人には、より子どもたちが歌いやすくなるようなアドバイスや指導をしてくださいます。また、ピアノだけではなく歌についての指導もしていただいています。歌は子どもたちにとって、季節を感じたり、生活の中でのルールを知ったり、あいさつをすることができるツールです。その歌を保育者が見本として発声できるような声の出し方、姿勢を学びます。

授業では主に、弾き語りの形で歌っています。弾きながら歌うことは難しいことですが、先生から指導していただき、実際に演奏することができると自分も楽しくなり、もっといろいろな曲を演奏してみたいと思うようになってきました。季節の歌や生活の歌を演奏し、実習に向けての練習にもなります。少人数で授業を受けることができるため、自分が困っていることを先生に直接相談でき、とても充実した授業の時間を過ごしています。

教員紹介

鈴木庸裕先生

これからが楽しみ、鈴木ゼミ

今年からはじまった3年生のゼミです。学校教育専修、障害児心理専修、心理臨床専修の3つの領域から集まっています。1年目ということもあり、まったく一から作りあげていこうと思いますが、ぼちぼちというところです。お顔ぶれは、青山君（所用があり写真に入れず残念）、宇野君、加賀沢さん、斎藤さん、菅谷さん、鈴村君、城君、高塚さん、真砂さんの9名。毎回ゼミでは文献レポートや発表などで、大変です。ゼミ教員の口癖は、「たくさん本を読む」です。自身の経験知や思いは大切です。あわせて、それを自身で裏づけたり根拠を持って自信をつけたり、人に語るときの表現力を高めたりなど、「活字」のもつ威力は絶大です。そして、身近な興味関心やつながりをもつ人との語らいや討論だけでなく、自分と考えが異なったりまだ出会えていない未知な人々との交流に参画してくれればと思います。そうした環境としての場づくりについて、後期あたりから学校教育や子ども福祉をめぐる多職種連携の機関や専門職との出会いを増やしていきたいと思っています。冬には、東日本大震災から8年、福島県の浪江町をステージにして調査研究ができればと準備を始めています。

心理職、教育職、福祉職がともどもに子どもたちのしあわせを考えて行く。その際、3つの職種のいずれの立場であったとしても共通するものの見方や感じ方、考え方とはなにか。そのことを自分の知と身体でつかみだして欲しいと考えています。「教育と福祉のつながり」という言葉はとても夢と希望を与えてくれますが、そんな簡単な営みではない。その意味で、このゼミは、学生たちも苦労すると思います。

先にも書いたように、専修が異なると、これまでの顔見知りかどうかや履修やカリキュラムの違いだけでなく、大学生活のリズムも違って来ます。ゼミ活動としては結構厄介ですが、工夫して乗り切っていきたいですね。

ゼミ活動紹介

吉野ゼミ

心理臨床学科障害児心理専修4年
中川志奈乃（なかがわ しなの）福井県・大野高校出身

私が所属するゼミの吉野先生の研究分野は臨床心理学で、大学病院精神科やスクールカウンセラーなど、さまざまな心理臨床の現場で働いてこられた経験があります。心理アセスメントや心理療法、なかでもゲシュタルト療法などの人間性心理学の人間観に基づく体験的心理療法が専門です。少し難しい言葉のように感じられるかもしれませんが、この大学で学びを深めればなんとなくでもわかるようになると思います。吉野先生はとても温和で、私たちゼミ生一人一人のことをしっかりと見てくれて優しく包んでくれるような先生です。

私たちの吉野ゼミは、現在3・4年ともに14人と、数あるゼミのなかでもかなりの大人数です。雰囲気は和気あいあいとしていて尚且つメンバーもそれぞれ個性的で笑いが絶えませんが、ディスカッションに集中するときは様々な意見が飛び交い、とてもアクティブです。先日行った「プレゼンスワーク（守護霊ワーク）」（永野＆平井、2012）では、メンバーからメンバーへ「その人が居てくれることで自分が何をもらっているか」と「（実現可能かは問わずに）その人にプレゼントしたいもの」を話しました。私はこのワーク中、メンバーからの言葉に思わず涙ぐんでしまいました。自分が気付いていなかった長所やメンバーが自分のことをどう思っているか知ることができたからです。普段言えないようなことを伝えられて、とても有意義なワークとなりました。

吉野ゼミでは、3年次前半は、倉戸ヨシヤ著『ゲシュタルト療法―その理論と心理臨床例』という本を読み、グループに分かれ、担当箇所を決め、分担した部分を分かりやすく噛み砕いて説明し発表する、ということを行いました。3年次後半から4年次では、それぞれの卒業研究に向けて先行研究を読み、それをまとめて分かりやすく発表したり、卒業研究計画における問題点や課題点などをグループで話し合い、メンバーにコメントをもらったりして、卒業研究に励んでいます。このような意見交換の場でゼミメンバーからもらえる意見はどれも的確で、自分にはない視点からの意見なのでとても貴重に感じます。

残り半年となりましたが、最後までゼミのメンバーと切磋琢磨し、吉野先生のお力もお借りしながら、最後まで走り抜けたいと考えています。